

気圧上昇！

上空の高気圧に覆われ北日本ショ - トオ - プン！

2000年 4月30日 JG0TEV 中村 豊

1. 気象解析

30日前半は、寒かった北日本でも暖気が入り気圧の上昇とともに弱く短時間ながらダクトの出現を確認しました。

地上天気図を見ると高気圧の中心は本州の南にあって、北日本ではダクトが出現する環境でないと考えられますが、

高気圧の中心から北にリッジがのび、地上の気圧が上昇したこと

北海道付近を中心に上空の高気圧に覆われたこと

からダクトが形成されやすくなったものと考えられます。

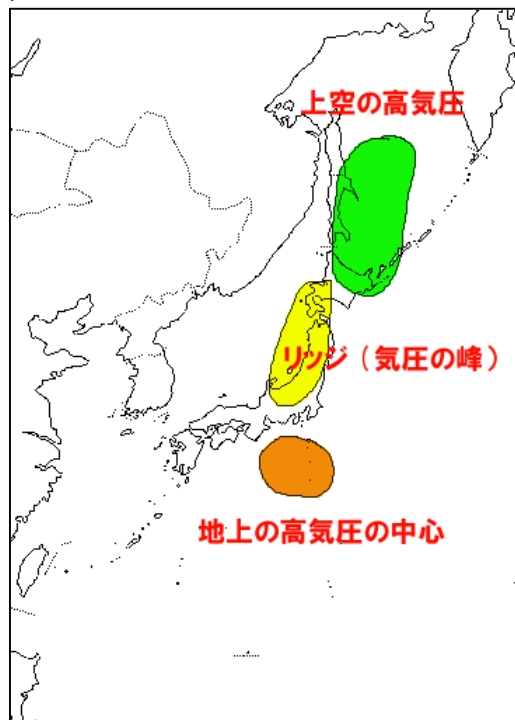
各局からの情報により午前中は、8 7エリア間でオ - プン状態であったようです。

午後から三島郡越路町にて移動運用を行ったところ、0 7エリア間のオ - プン状態であったことを確認しました。

(14時から15時にかけて秋田県本荘市のレピ - タ - をピ - クRS59で受信しました

・レピ - タ - はGPですので、完全にダクトによるオ - プンです。)

< 30日3時の天気図解析 >



< 移動運用地/運用設備 >

移動運用地/新潟県長岡市移動

運用設備 /KENWOOD TM-455/10W/430MHzFM/自作 K1FO 22エレ2列1段

3. 考察

< 30日のオ - プンについて考える >

高気圧の中心は本州の南海上を通過したため

気圧配置は南が高く、北が低く日本海は低圧部となること(気圧の上昇が無い小さい)

の気圧配置によって日本海では西風が卓越して大気が攪拌されてしまうこと

などの諸条件から、ダクトの発生は絶望的になります。

今回の北日本でのダクトの発生は

午前中の地上天気図から読み取れるように高気圧の中心から延びるリッジが北日本にあること

北海道から東北地方にかけては上空の高気圧に覆われていること

西日本から近づいてきている気圧の谷から遠く離れていること

から、午前中を中心に

気圧の上昇が続いた
乾燥空気に覆われた

気温上昇によって冷たい海水温との間で逆転層が形成されたことにより形成されたと考えられます。
なお、気圧が下降に転じ、低気圧の接近により湿度が上昇した夕方にはダクトが消失しました。

<表1 気圧変化の推移>

	29日21時	30日3時	30日21時
津軽海峡付近(前日比)	1008	1014(+6)	1014(0)
秋田沖(前日比)	1008	1016(+8)	1012(-4)
能登沖・佐渡沖(前日比)	1012	1016(+4)	1012(-4)

<表2 29日～30日の気温変化・日較差>

1999年4月29日の気温	金沢市	新潟市	秋田市
29日最高気温() (0-15時)	16.6	16.1	10.9
30日最低気温() (21-9時)	7.8	7.6	10.2
日較差()	8.8	8.5	0.7
30日最高気温() (0-15時)	20.1	20.4	16.5
気温上昇量()	12.3	12.8	6.3